ダニエル・シュタインが通訳したこと

リュドミラ・ウリツカヤ著、前田和泉訳
『通訳ダニエル・シュタイン』
新潮社　二〇〇九年九月

主人公のユダヤ人ダニエル・シュタインは、生と死の狭間の中で生き抜いてきた人物である。「十九歳。生きていること自体、奇跡でした」と語り、ナチスの秘密警察ゲシュタポの通訳として働かざるを得なかった戦争中の過酷な現実を通して、ダニエルは他者を認める資質と寛容の精神を獲得したのであろう。通常の精神状態では生きられなかった戦争当時では、この資質を持つことは難しかった。そして、寛容の心は、その後の人生において自らのアイデンティティを宗教や思想や民族や社会に求めるのではなく、自分を信じる心に求めたダニエル・シュタインの精神の拠り所であったと思われる。

作者のリュドミラ・ウリツカヤは、あるインタビューの中で「彼が私の家に入ってきた時、息をすることができなかった。全く違う種類の人間だ。言葉で言い表せない聖なる物を感じた」と、実在の人物ダニエル・ルフェイセンとの一九九二年のモスクワでの初めての出会いについて語っている。それから、ウリツカヤはこの実在のダニエルを下敷きに、無限の誠実さと勇気と寛容な精神をもった「とても愛想のよい、普通の人」ダニエル・シュタインを十年間にわたって描くことになる。

ダニエルがどのようにして寛容の心を持ちえたのか、持たざるを得なかったのか。その秘密を明らかにしていくのが、他の登場人物たちの声である。しかも、第二次世界大戦、戦後、そして現在までの時間とアメリカ、イスラエル、ポーランド、旧ソ連等の場所が、多くの小説の登場人物の声と共にダイナミックに動きまわっている。こういった時空間の中で、フィクションと現実とが交じりあったモンタージュ形式によって通訳ダニエルの形象が生き生きと魅力的な人物として浮かびあがってくるのである。

実在のダニエル・ルフェイセンは、ポーランドに生まれたユダヤ人で、第二次世界大戦中、ゲシュタポの通訳として働き、ベラルーシのある町のゲットーから多くのユダヤ人を脱出させ、救った。ナチスからの逃亡中に寄寓した女子修道院で洗礼を受け、二〇歳でカトリック信者となり、その後カルメル派の神父となる。一九五九年にイスラエルに出国し、キリスト教の他民族社会に根をおろし、ヘブライ語でカトリックの礼拝を執り行った。しかし、カトリック信仰のために、ユダヤ人でありながら、イスラエル国籍を拒否された。また、宗派を超えた教会を目指した彼の活動は、ローマ・カトリック教会から異端視された。ほぼ四十年間イスラエルに居住し、カトリック神父として活動し、一九九八年心臓発作で死亡した。実在の人物と小説の主人公の人生における違いは、その死の迎え方にあるとされる。

この小説では、作家の創作上の主人公ダニエルを中心軸として、世界各地に住む多くの登場人物の声を通じて、非寛容の精

神から生まれる現代社会がかかえる問題が浮き彫りにされる。それは民族問題、親と子の問題、夫婦の問題、性の問題、信仰の問題、宗教の問題、過激民族主義の問題、ナショナリズムの問題、アイデンティティの問題などである。しかも、これらの解決困難な問題は、登場人物が直接関わる書簡、新聞記事、講演会や対話といった形式を通じて、読み手に立ちはだかってくる。ダニエルは、「解けない問題は山ほどあるのです。解くのではなく、共存し、耐えてゆく術を学ばなければなりません。そういうものがこの世には存在するのです」と語り、さらにその時に何もしないのではなく、自らの判断で行動することが重要だと強調する。

ウリツカヤ自身も、インタビューで「ダニエルから教えられたことは、その人が何を信じているのかが重要ではなく、重要なのはその人の行動だということです」と述べている。このダニエルからの教えを、『通訳ダニエル・シュタイン』発行後にウリツカヤ自身が具体的な行動をおこなうことで実現している。彼女は、B・アクーニンやV・ペレーヴィンなど著名な作家達と共に本を刊行することで、モスクワに初めて設立されたホスピスへの支援活動をおこなっている。さらに、編集者として子供の教育書シリーズの編纂に参加している。この子供向け書物シリーズは、様々な民族の伝統・習慣・歴史などを紹介し、異文化に対する寛容性、他者を尊重し、認めること、理解することを子供たちに伝えることを目的に刊行されている。これは、小説の中でダニエルが自分の生い立ちを通して、他者を認めることを子供たちに話しかけている姿を思い起こさせるものである。

読み進めていくと、青年時代の通訳としてのダニエルより、神父として活動するダニエルの姿が多く描かれている。そのため、ユダヤの歴史、ホロコースト、キリスト教の教義、新約・旧約聖書などが描かれ、ヨーロッパのキリスト教文化から離れた場所にいる私には難しく感じる点があった。だが、それ以上にこの本が読者を惹きつけるのは、ダニエルの人間としての優しさであろう。目の前の問題に対する解答を準備するのではなく、ダニエルは常に問題を抱えた人々に寄り添っている。それゆえに、彼の暖かい人間目線が至る所に感じられるのである。

そこには現代社会が抱える不寛容と無理解の問題解決のために、黙々と誠実に、他者への優しい、暖かい眼差しを持って行動するダニエルの姿に、作者ウリツカヤの姿を重ね合わすことができるのではなかろうか。多様性を認める寛容の精神を伝えることが、心の通訳者ダニエル・シュタインと作者ウリツカヤ自身が残そうとした子供たちへの未来への遺産ではないのだろうか。

作者：リュドミラ・ウリツカヤ　一九四三年生まれ。モスクワ大学卒業後、『ソーネチカ』などを発表。現代ロシアで最も活躍する人気作家。

（中神美砂）